

- (1) = 牧草地輪換放牧
(2) = 野草地放牧・繫牧
(3) = 合牧

富士西南麓の地形と土地利用

— 富士宮市南部と芝川町の場合 —

浅井法子

富士火山は、第三紀層を基盤に洪積世の後期に古富士火山が噴出し、沖積世の初めに現山体を作る熔岸の噴出があつて成立したと考えられている。調査地域はその西南麓にある海拔500m以下の地域で、東南に流れる潤井川を境として現山麓と古富士丘陵に大きく区分できる。地形区分を更に、潤井川沖積低地、富士火山原面、火山性扇状地及び氾濫原、古富士火山原面、段丘群、谷底平野、急崖に細分したのは、自然環境の諸要素を総合的に理解し、併せて農業環境として捉えられると考えたからである。(分類は主として写真と地質資料、現地調査による。)火山性物質と、その上に沖積した層から成る地域だが、不透水層である古富士の集塊質泥流が地表に出ていて、富士裾野の湧泉地帯にあたる。一般に水に恵まれない火山麓と較べ、水は豊富である。東海式の気候は温暖で、平均気温14.7°C、年雨量2121mm(富士宮)である。気温の標高による差も500m以下なのであまりない。

調査目的の一つである、火山の構造を捉えることは、以上のように主として津屋先生の地質をはじめとする諸資料や現地調査によつたが、主目的は、この自然条件のもとに古くから開発されてきた火山地域の本地域が、一般的な火山土地利用からみて、特に農業の地域性をみることである。古くから開発されていること自体、火山麓としては一つの地域性であるので、まず本地域の歴史地理的考察を試みる。

本地域は弥生時代には既に人間が居住し、それ以前も水の得られる地点には住んでいたと考えられる。富士山をめぐる信仰はその頃から深く、富士浅間神社、富士講、日蓮宗等がある。これは他火山と比して特殊である。その富士山麓でも、直接低地に臨み、東海道を面し、甲州への連絡であつた大宮(現富士宮市)は、富士山の宗教関係の中心地としてまず発展したのである。門前町が形成され、今日の富士宮の商業性の基礎を作り、日蓮宗派の参拝は、今日異常な程の寺もある。沖積低地の神田のみだつた耕地は、寺領も増し、山麓の原始林も開かれていくことにより拡大されていった。本門寺堀(現北山用水)の開設(1582年)は画期的作業であつたのである。江戸時

代に入って、良質で豊富な水のある山村がやったように、手漉和紙製造が伝わり、養蚕もやっていた。各種作物も伝わり、耕地化を進めて集約的土地利用がなされるようになる一方、商業も発展して、人口が増加した。この蓄積故に、明治中期の手漉和紙から機械製紙への技術革新の際も、労働力、原料水、交通の便と条件がそろい、近代製紙業都市への転換に成功したのである。

農業を中心としたこれまでの経済は、工業の伸展と変化し、農業経営は自然条件もさることながら、工業を始めとする諸人文条件に多く支配されるようになる。今日富士宮は、周辺の富士・吉原と共に工業地帯を形成しつつあり、地域内の労働力を全部吸収する程の大市場ではないが、沼津・清静地区に近く、東京市場もトラック3時間半の位置にある。

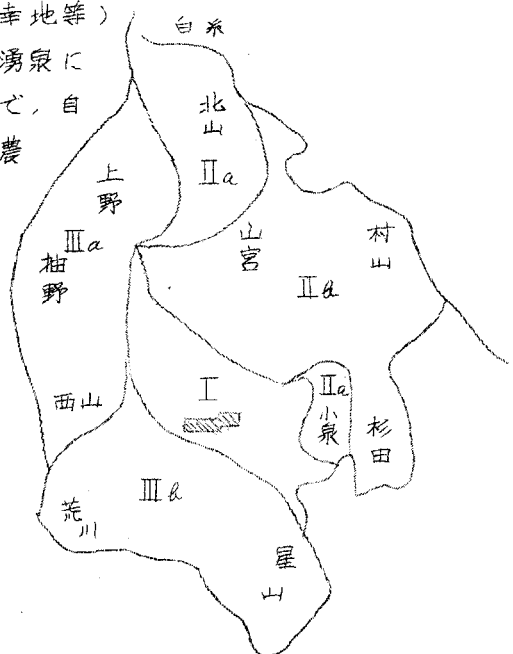
主目的たる農業の問題に入るが、まず兼業率の高い事が特徴である。狭少な耕地(平均6.3反)と多い人口、それに工業労働力等の需要が多いことが原因で、戦前からの著しい傾向で、最近も激しい。特に市街地附近は第二種兼業が50%以上を占め、工業用地化の傾向もみられている。専業農家は1町歩以上の農家にみられ、山麓部にわずかに固まってあるが、一般に自給用作物(米・麦・さつまいも・蔬菜 etc.)を作る農家が多い。山麓の北山・山宮、村山では他に商品作物のたばこ、落花生・菜種、それに近年富士かんらんが進出してきたようである。地域内の農業を地形区分を利用し、水利、耕種等の関係をまとめると、次のような農業地域区分ができる。

I. 潤井川水田地域(淀師・大宮・阿幸地等)

潤井川沖積低地一帯。潤井川と湧泉による灌漑。第二種兼業率45%で、自給農業が殆んど。養蠶業を行う農家もある。

II. a. 山麓畑地帯(北山・大岩・小泉)

火山性扇状地及び氾濫原の所が広く、一部富士火山原面、沖積低地を含む。北山用水と弓沢川用水による灌漑。水田は多くて50%近くを占める。たばこ、養蚕等の換金作物又は有畜を行う。



II 6. 山麓畑作地域（村山・杉田・山宮）

火山性扇状地，富士及び古富士原面に展開される有畜農業と蔬菜農業。
耕地広く専業多い。商業的農業。

III a. 古富士丘陵水田地域（白糸・上野・柚野）

火山性氾濫原と荒川沿岸段丘。芝川本流からの灌漑。米作は60~85%
麦，甘藷，落花生を加えた組合せ。

III 6. 古富士丘陵田畑地域（芝富・安居山・屋山）

古富士丘陵を屋山丘陵（古富士火山原面）は耕地平均4.5反で自給用
農業。第二種兼業は50%を示す。

最後に本地域の農業の地域性であるが，他地域と具体的に比較するには条件が不十分のような地域ばかりだったので，本地域の特徴的な点を抽出して
みる。

①水，気候に恵まれているが，新しい火山地域なので，火山灰土壌特にマ
サの問題があり，畑作に障害がある。

②標高の低い地域であるから（火山麓としては），交通（鉄道・道路）の
便がよい。工業・商業の発展性があり，市場も近い。

③古く開発されたので耕地化が進み，作物も多種で，集約的農業である。

④小規模経営なので兼業農家が多く，自給農業である。特産物といえるも
のなし。

⑤酪農業は取入れられているが，専業ではほんのわずかで，養鶏，養豚等
が積極的に行なわれている。

結論的に云えば，火山地域の農業としての性格は，水利・土壌等の自然条
件の中に見られるが，開発初期には影響の大きかったこれら自然条件は，現
在では農業経営に決定的な条件ではない。地お総市周辺地域としての性格が，
兼業や蔬菜・酪農業に現われているといえよう。

高冷地農業の地理的考察

—長野県南佐久郡野辺山原の場合—

山中正子

長野県の八ヶ岳山麓に位置する野辺山原は，標高1,300mから1,300mに
かけて，林野と畑作地の広がる超高冷地域である。

当地域を調査した究極の目的は，野辺山開拓集落を中心にした野辺山原の
“特殊性”——地域性と言いたいところである。しかし，地域性というには余
りにも調査範囲のスケールが小さ過ぎる。従って，調査終了後は“特殊性”